

藤並の森

Vol. 38



▲1970年春 後楽園スタジアムでの清岡氏(写真提供／文藝春秋)

清岡卓行のふるさとが、かつての日本の租借地関東州の大連であり、そしてその文学の原点が「華やかな自由港大連」の記憶と、引揚者としての苦難にみちた敗戦体験であることはよく知られている。けれども彼が詩や小説に繰り返し描いた大連は、戦後日本の生活を生き抜く上において実際上の支えになってくれることのない幻の都会であった。国籍や歴史の限定を受けない心の中にひそかに息づいているこの都會を、彼は「風土のふるさと」と呼んでいる。

これに対して彼が「言語のふるさと」と呼ぶものは、「生活のよりどころとしての日本語」であった。日常生活はもとより永年にわたるその作家活動を根底から支えたものはこれであった。言うまでもなくこれら二つのふるさとは、欠如の関係として互いに密接にかかわり合っている。「風土のふるさと」はそれがあらかじめ「失われた」ものであつたがゆえに、清岡が駆使することの出来る「言語」の力によって、繰り返し探求し続けられたのである。『アカシヤの大連』を初めとする一連の「大連もの」は、そのような探求のゆるぎのない成果であつただろう。

こうした二つのふるさとに対して、清岡が両親の生れふるさとである高知をつよく意識して、

リレー随筆

清岡卓行のふるさと——宇佐美 齊

うさみ ひとし

これを「血縁のふるさと」と呼んだのは、随筆集『サンザシの実』(一九七二年)所収の紀行文「ふるさと土佐」においてであつた。清岡はこの紀行文を一九七二年四月から五月にかけて『朝日新聞』紙上に五回にわたって連載するに先立つて、四日という短期間ながら深い思いをこめた高知旅行を敢行している。一九四三(昭和十八年)の秋と冬、つまり学徒動員の徵兵検査と召集の時以来、実に二十九年ぶりの再訪であった。

この体験はやがて第五詩集『固い芽』(一九七五年)所収の一篇「血縁のふるさと」で結実するだろう。一部に分たれるこの詩篇の第一部は、足摺岬を舞台に選び、そこに青年期の懊惱や自殺の哲学、そして「血縁のふるさと」への「ふしきな郷愁」が交錯する様を描いている。第二部は中村市を舞台にして、不意を襲つた「強烈な放浪の衝動」にかられた詩人の身内を、中世以来土佐をさまよつた漂泊者たちの亡靈が「吹きぬけて行くのを感じ」という、東の間の幻覚を定着している。

首都圏の西郊に住みそこで生を終えた清岡卓行の文学の広がりと深化とを観測する上で、高知という土地はやはり欠かすことのできない定点であるにちがいない。

(京都大学名誉教授・フランス文學者)

会
紹
介
Exhibition

開館十周年記念特別企画

清岡卓行追悼展

清岡卓行 人と文学

高知出身の詩人で作家の清岡卓行さんが、この世を去られたのは、二〇〇六年（平成十八）年六月三日のことで、早いもので、一年あまりが過ぎました。

この度、高知県立文学館では、清岡卓行さんを偲んで、二〇〇七年（平成十九）年十一月二日～十二月十九日まで、「清岡卓行 追悼展」を開催することといたしました。

また、当館は、十一月二日に開館十周年を迎えるので、今回「十周年記念」の展覧会としても取組みました。

▲高知城にて（一九七二年四月）

一時期、日本野球連盟に就職するなど、野球への嗜好は生涯一貫して続きました。また、小学生の頃は、数学が得意で図工が苦手、当時のあだ名は頭が大きかったので『風船』だったと自筆年譜には書かれており、この頃を描いた小説には「萌黄の時間」（『フルートとオーボエ』所収）があります。

清岡さんは、父母の生地土佐の情熱と、大連で育まれた国際性を持ち、



▲「アカシヤの大連」1970年3月／講談社刊

鋭い感性と深い思索で、優れた小説、詩、エッセイ、評論を数多く残されています。

一九七〇（昭和四五）年、大連への思いを叙情的に綴った『アカシヤの大連』で芥川賞、一九九九（平成十二）年には一九二〇年、三十年代のパリを舞台に画家藤田嗣治、詩人金子光晴らの芸術家群像を描いた小説『マロニエの花が言つた』で第五二回野間文芸賞などを受賞していますが、もともとは、詩人として出発しています。

『氷つた焔』の他、『日常』『幼い夢と』など、次々と独自の詩世界を構築、一九八五（昭和六〇）年『初冬の中国で』で第三回現代詩人賞、一九八九年（平成元）年『円き広場』で第三九回芸術選奨文部大臣賞、一九九〇（平成二）年『ふしきな鏡の店』で第四回読売文学賞、一九九二（平成四）年『パリの五月に』で第七回詩歌文学館賞、一九九六（平成八）年『通り過ぎる女たち』で第三回藤村記念歴程賞、二〇〇一（平成十四）年『瞬』で第二十回現代詩花椿賞、二〇〇三（平成十五）年『一瞬』『太陽に酔う』で毎日芸術賞と、次々と受賞。豊かで奥深い作品を発表し、詩人としての地位を確立しました。

また、エッセイでは、一九七二（昭和四七）年発行の『サンザシの実』をはじめ『猛打賞』『郊外の小さな駅』などを発表。評論には、高校の教科書でも紹介された「失われた両腕」ミロのヴィーナス掲載の『手の変幻』、『抒情の前線』、『萩原朔太郎「猫町」私論』など優れた作品が残されています。

そして、文化への功績から、一九九一（平成三）年には紫綬褒章、一九九八（平成十）年には勲三等瑞宝章を受章されました。



▲処女詩集「氷つた焔」
1959年2月／ユリイカ刊
(500部限定)

会 覧 展

Exhibition

開館十周年記念特別企画

清岡 卓行 追悼展

平成19年
11月2日(金)

▼
12月19日(水)
企画展示室
観覧料550円

第二部は清岡さんを偲んで清岡さんが愛し
第一部では、清岡さんの作品を中心に構成。

- 第一部 清岡卓行 人と文学
- 第二部 清岡さんを偲んで
- 第三部 清岡さんと土佐

定です。

今回の展覧会では、清岡卓行さんの人と
文学を顕彰し、左記の内容でご紹介する予
定です。

違った郷愁が綴られていました。
秋から冬、学徒動員の徵兵検査と召集のた
め高知の土を踏み、一九七二(昭和四七)年
に来高したときには、朝日新聞に「ふるさ
と土佐」というエッセイを連載しています。
その中で清岡さんにとつてのふるさとはや
はり二三年間住んだ「大連」。「土佐」は「血縁
のふるさと」であり、大連への思いとはまた

このようないい経験をお持ちの清岡さんです
が高知との関係を見てみますと、三度高知を
訪ねています。

一九四三(昭和十八)年戦局が苛烈となつた
秋から冬、学徒動員の徵兵検査と召集のた
め高知の土を踏み、一九七二(昭和四七)年
に来高したときには、朝日新聞に「ふるさ
と土佐」というエッセイを連載しています。
その中で清岡さんにとつてのふるさとはや
はり二三年間住んだ「大連」。「土佐」は「血縁
のふるさと」であり、大連への思いとはまた

このようないい経験をお持ちの清岡さんです
が高知との関係を見てみますと、三度高知を
訪ねています。

このようないい経験をお持ちの清岡さんです
が高知との関係を見てみますと、三度高知を
訪ねています。

清岡さんのふるさと

た文学、音楽、花、そして閑わりの深かつた
野球について展示。第三部では、朝日新聞に
連載されたエッセイなどを中心に、ご両親の
ふるさと(田野町や奈半利町)をご紹介する
予定です。

ご遺族で作家の清岡(岩坂)恵子氏に監修
をお願いし、ご子息の秀哉氏協力のもと日本
近代文学館、阿藤伯海記念公園をもつ浅口市
などが所蔵されている清岡さんの関連写真、
原稿、創作・関連資料、遺愛品、書簡等厳選
した約二百点を展示、清岡さんの人と文学
をご紹介いたします。

多くの皆様のご来館をお待ち致しております。

(学芸課／津田加須子)



▲清岡さんが文学館のために書いて
くださった「ある願い」の原稿

◆清岡卓行展関連企画のご案内◆

☆オープニングセレモニー

平成19年11月2日(金)午前9時~

- ・ご遺族や知人の方々とともにテープカットをおこないます。
当日は展示解説もございます。

☆記念講演会

平成19年11月3日(土・祝)午後2時~

場 所：高知県立文学館1階ホール
内 容：京都大学名誉教授・フランス文学者 宇佐美齊氏による講演
参加料：企画展観覧券が必要です(但し、2割引)
定 員：100名／お電話・受付にてお申し込みください(Tel: 088-822-0231)

☆朗読の会「清岡卓行の作品を読む」

平成19年11月17日(土)午後2時~

場 所：高知県立文学館1階ホール
内 容：清岡さんの作品を朗読でお楽しみください。
参加料：無料
定 員：60名／当日、会場におこしください。

☆自作を読む(ビデオ上映)

平成19年12月2日(日)午後2時~

場 所：高知県立文学館1階ホール
内 容：清岡さんが自作を読んでいるビデオなどを上映いたします。
参加料：企画展観覧券が必要です(但し、2割引)
定 員：60名／お電話・受付にてお申し込みください(Tel: 088-822-0231)

☆展示解説

- ・担当学芸員が分かりやすく展示の解説をいたします。(要観覧券)
11月10日(土)・17日(土)、12月1日(土)・15日(土)午後1時30分~

「寅彦の描いた花々」展 10月21日(日)まで開催中



企画展では、以下のコーナーを設けて、約七十点の作品をご紹介しています。

ご用意していますので、あわせてご覧ください。

東京の自宅の庭には四季折々の花々が植えられていました。ここでは、病気療養中の寅彦が描いた、自宅の庭や室内の作品を展示しています。また、このコーナーには、花壇に座り込む妻の後姿を描いたものがあります。

現存する寅彦の作品のなかには、家族を描いたものが何点かあり、それぞれに向けられた温かい眼差しを感じさせます。

寅彦は少なくとも十一枚の自画像を描いたといわれていますが、現存する絵画資料は当館所蔵の三枚のみとなっています。今回は寺田寅彦記念室を含めて、そのすべてを展示していますので、あわせてご覧ください。

【花物語】

ここでは、それぞれ日本画、水彩、油彩に描かれた花を展示しています。日本画のなかには、「数柏子集」の挿絵の原画にもなった

「ベゴニア」があります。欄外にサイズ等の指示が書き込まれていますので、じっくりと眺めてみてください。また、このベゴニアは「病室の花」で述べられているように、夏目漱石の重態という報知を受け、そのお見舞いに持つて行った、思い入れのある花でもあります。「病室の花」の該当箇所は、展示室にも

当館所蔵「いちご図ふろしき」には、このローマ字の一首が添えられています。ここにみられる通り、花は寅彦の好きなもののひとつでした。実際に、幼少年期の想い出や日常のふとした発見などが花と共に語られ、また、文章としてだけでなく絵としても遺されています。

開催中の企画展では、寅彦が自らの眼で捉えた花々の姿などを、絵画を通してご紹介しています。



(学芸課／森香奈子)

【自画像】

◆関連企画のご案内◆

【展示解説】 日 時：10月13日(土)・21日(日) 両日とも午後1時半～(20分程度)

内 容：担当学芸員による簡単な展示解説を行います。

参加料：当日観覧券が必要です。※当日開催時間に、お越しください。

【寅彦愛用の蓄音機を愉しむ】

日 時：10月14日(日) 午後2時～(1時間程度を予定)

場 所：文学館ホール

内 容：寅彦愛用のピクター製蓄音機で、愛蔵のレコードを朗読とともに聴くイベントです。今回使用するのは、1921(大正10)年に購入した、二代目の蓄音機です。寅彦が聴いた音色を愉しみに、ぜひ文学館へお越しください。

参加料：当日観覧券が必要です。※事前に電話でお申し込みください。



恋愛は社会進歩の源なり

—女性解放論者・田岡嶺雲—

猪野 陸

田岡嶺雲の碑が高知市旭町の木村会館の庭に建つたのは、いまから二〇年ほど前だつた。没後七五年目にあたつて、碑には「女子解放は男子解放也」の原稿から起した文字が刻まれた。

一八七〇(明治三)年、高知市赤石町にうまれるが、自由民権運動がもり上つていく一二歳のとき、民権結社嶽洋社に加わり、小柄な少年嶺雲は、壇上に首だけにして政治演説をするほど早熟だつた。のちにみずからを「三尺の童子」とかいた。

長じて東京大学漢文科選科をすみ、新進の文芸評論家として登場、樋口一葉や泉鏡花を押しだしていくが、文筆では喰えず津山中学校漢文教師となつた。ここで地元芸者大磯かつと大恋愛となるが、落籍できず結ばれなかつた。女子解放論者の始まりである。

一八七〇(明治三)年、高知市赤石町に生まも嶺雲はその時自由民権運動に加わり、その活動で文部省の東京大学漢文科選科を卒業し、文芸評論家として登場、樋口一葉や泉鏡花を押しだしていくが、文筆では喰えず津山中学校漢文教師となつた。ここで地元芸者大磯かつと大恋愛となるが、落籍できず結ばれなかつた。女子解放論者の始まりである。

(詩人)



▲田岡嶺雲の碑

高知ペンクラブや自由民権記念館友の会の文学・歴史散歩ツアーでは津山へゆき嶺雲をしのんだが、そのとき話題になつたのが「月見草のような女」かつとの恋だつた。二人が逢瀬を重ねた吉井川べりの旗亭の離れは、その後大雄寺に移築され「嶺雲庵」として保存されていたが、ここでは講師の愛の解説にも力がこもつた。

嶺雲はその後「万朝報」などの記者となり、幸徳秋水の「平民新聞」寄稿家にもなつていて、中国へわたり日本語教師として教鞭もとつた。この間、嶺雲のかいた「嶺雲搖曳」「壺中觀」「霹靂鞭」などほとんどの著作は発禁だつた。

晩年は脊髄病が進行するなかで自叙伝「数奇伝」を書き、一九二二(大正元)年、四二歳で没した。少年時代から自由民権運動に共鳴参加、硬質の文芸評論、社会評論家となつた。著作物は発禁つづきで、太平洋戦争が終るまで「生き埋め」にさらされてきた。中江兆民・幸徳秋水らとともに思想家として光があたられ評価されるようになるのは戦後一九四五五年もじばらくたつてからだつた。「恋愛は社会進歩の源なり」「女子解放は男子解放也」と女性解放を論じてきた。碑の裏には本名佐代治。

「文芸評論家として現れ特に女性解放論の文明批評家として現れ特に女性解放論の先駆だつた」とある。

常設展虫がぬ

おおえ みつお
大江満雄(一九〇六～一九九二)

文学館に幡多郡宿毛町(現宿毛市)

出身の詩人・大江満雄自筆の詩「四万

十川」が所蔵されています。満雄の代

表作としてよく知られているこの詩

は一九九〇(平成二)年に四十万十川河畔

に詩碑として建立されました。この詩

には、詩人のふるさとの川への痛切

な望郷の念がおりこまれています。

満雄がこのふるさとを離れ、上京したのは十四歳のときのことでした。

東京の親族が経営する印刷会社を頼

り父とともに上京した満雄は、労働

学院に通いながら詩を書き始めます。

生田春月の影響を受けてキリスト教

人道主義的な作品を書いていた満雄

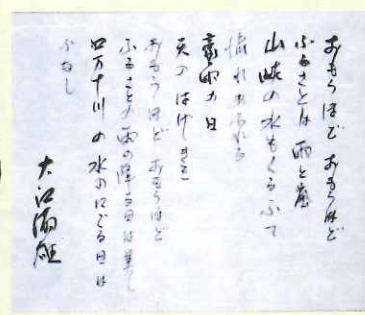
は次第に社会的関心を深めていき、

プロレタリア詩人として活動するよ

うになります。「プロレタリア詩」「詩精神」などに詩を発表するなど精力的に活動していた満雄は一九三二

(昭和七年)と一九三六(昭和十一)年に二度検挙されます。一度目の検挙の時には、妻の機転で仲間の名簿を

米びつの中に隠し、仲間に迷惑をかけずに済んだと後年回想しています。



▲自筆の詩「四万十川」



資料受贈報告

—最近の寄贈資料から—

『合同歌集 森の輪唱—高知歌人六十周年記念—』

戦後荒廃した世相の中、「一九四七（昭和二二）年十月「高知歌人クラブ」が結成され、影山聖二・依光亦義・安部忠三らによつて機関紙「高知歌人」が創刊されました。以来多くの先人のたゆみない努力が重ねられ昨年九月に創刊六十周年を迎えました。編者は跋文「集のあとに」で「高知歌人」は、尾上柴舟・細井魚袋の流れを汲み、草創期から「流派を越えて個性の尊重とロマンを打ち立て、明るい生活の歌を目標」とし、伝統短歌を大切にしながら新しい時代の人間社会・自然を捉え、叙情性を高め、和の精神で短詩型文学の発展を目指してきました」と述べています。六十年の間に多くの叢書が刊行され本書『森の輪唱』で



瑞枝・「遺歌集・花見酒」 岩崎健三著 現代短歌を
考える会 ▶ 土佐学協会・たまるか! 土佐がはみか
える 土佐学年報 別刊号 土佐学協会編刊 ▶ 谷口
弘子・「創作集」草の葉 第五十一集 草の葉同人編刊
他 ▶ 井上久美代・「歌集」椎の花 井上久美代著 高
知アララギ発行所 ▶ 高知歌人社・「合同歌集」森の
輪唱 — 高知歌人社六十周年記念 — 西岡瑠璃子編
高知歌人社 ▶ 林嗣夫・「詩集」花ものがたり 林嗣
夫著刊 ▶ 坂本稔・「詩集」暁 坂本稔著 リーブス
ル出版 ▶ 山脇映子・「小砂丘賞作品集」32 小砂丘
賞委員会編 高知市民図書館

このほか、全国の個人・関係機関の方々から数多くの資料をご寄贈いただきました。厚くお礼を申し上げます。

受贈報告（平成十九年六月～八月） 敬称略

敬称略

▼妻鳥季男・「空海の風景を旅する」 NHK取材班著
中央公論新社他 ▼横田晴光・「寺田寅彦全集 全三十巻 寺田寅彦著 岩波書店他 ▼市原麟一郎・「子供も語る戦争」(ナムル物語第4集) ひつじ出版社

七十七篇、十四番目の作品集となりました。これらの叢書の中には「一九六一」(昭和三七)年に刊行された死刑囚平尾静夫の遺歌集『蟲になりても』があります。この歌集は宮城拘置所の獄中から「高知歌人」誌に寄せられた歌を「歌人」編集者田所妙子が編集刊行したもので、六十年十月刑場に消えるまでの一年間の歌が収められています。標題は「刑場に果てる命を嘆きつゝ蟲になります。」當時地元「高知新聞」を始め全国紙でも報道されて大きな話題を呼びました。

この合同歌集『森の輪唱』には一二五人、千六百首の歌が収載されています。

“防空壕から鉄兜をかぶつて今出て来たところ(です)。○月十一日付のお封書有難く拝受。皆さまのお元気のままを思ひ、うれしさの光にとりまかれました。雨季上りで第一線のこゝ^{ビルマ}緬甸(※現在のミャンマー)の空はなかなか物凄く、やはり生きることが一つの奇跡のやうな日々です。——”

「一〇三高地」(満州詩人)を中心活躍し、詩集『地貌』『十億一体』『戦記宣撫班』を刊行するなど、その精力的な行動と創作への情熱から「満州のバルザック島崎」と異名がついていました。(※バルザックはフランスの小説家) 戦後は詩誌「蘇鉄」を創刊し、多くの詩集を刊行することも、岡本彌太の詩碑建立に尽力し、高知詩人協会を結成するなど、高知詩壇の発展に多大な足跡を残しています。現在、文学館の常設展では自筆の色紙がご覧いただけます。

島崎 曙海（一九〇七—一九六二）

常設展

玉効
が

10



▲自筆のハガキと
『ビルマ便り』

朗読コンクールの地区審査が開催されました!

今年で10回目を迎えた

朗読コンクール。

その地区審査を、8月下旬に

県下3会場で行い、参加校・

小学校35校、中学校15校、参加

者数103名の中から県審査への

出場者を決定しました。

今年は炎暑という表現がぴったりなほど暑い夏でしたが、その暑さに負けず練習を重ねてきた成果を存分に発揮した参加者が多く、第10回という節目にふさわしいコンクールとなりました。特に、聞いていて情景が浮かんでくるような素晴らしい朗読には、会場から盛大な拍手が贈られました。

小学校低学年では元気いっぱいにはつきりした声で朗読する児童、小学校高学年では気持ちを込めて聞く人に伝わるような表現を心がけた児童がたくさんいて、中学生はしつとりとした朗読を聞かせてくれました。自分の良さを出し切ろうと頑張ったことは、参加した児童生徒にとって良い経験となつたことでしょう。

地区審査で選出された21名は、11月18日

(日)に開催される県審査に出場します。

子どもたちの素晴らしい朗読を聞きに、ぜひ、ご来場ください。

(学芸課／間城彩佳)

▶ 各会場での記念写真



今年の講師は

有川 浩先生

高知出身のライトノベル作家。記念講演会後にサイン会も開催!!



※記念講演会のみの
聴講も可能です。

朗読審査 & 記念講演会

11/18(日)

※審査は13:00から
講演会は14:30から
を予定しています。

館長室から

溝渕 良一

文学の世界へ子どもたちを導き入れようとの思いで、開館以来朗読コンクールに取り組み、今まで10回を数えました。毎年多くの子どもたちが参加していますが、今年も100名を超す申し込みがあり、八月に県下三会場で地区審査を行いました。

最近は、子どもたちの活字離れ、本離れの傾向が強くなっているといわれています。ゲームの普及や進学競争で、子どもたちにゆったりと読書の時間を与える環境が狭められているように思います。また、親や周りの人たちにもじっくり読み聞かせのできる時間が無くなっているかもしれません。

こんなことを考え、我が子に読み聞かせをした昔のことを思いながら子どもたちの発表に耳を傾けました。

朗読には奥深いものがあり、そのよしashの評価はすべくありませんが、自分が読みたい本を読み、その中から強く感じた部分を選んだと思われる子どもたちが少なからずいました。朗読の内容は、ちょっとした心情の機微や日常的な情景ながら、この子はこういうことに感動したのかと、その独自性とともに成長の一ページを感じました。これから成長の過程で、新たな発見に出会えるいい本をたくさん読めよ、と声援する気になりました。

地区審査で選び抜かれた本選は一月一八日。予選でのすばらしい出来映えのうえに、更に磨きをかけてくると思います。審査にあたられる先生方の選考の苦労が目に見えます。



企画展 案内

「寅彦の描いた花々」展

- ◆会場／高知県立文学館 2F企画展示室
- ◆観覧料／一般350円(常設展含む)
- ◆開館時間／午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

平成19年10月21日(日)まで
19年(※会期中休館日なし)

物理学者にして名隨筆家である寺田寅彦(1878-1935)は、植物にも造詣が深く、自宅には四季折々の花々が植えられていました。展覧会では、寅彦の隨筆や絵画から寅彦が自らの眼でとらえた花々の姿を紹介いたします。



「赤い花」

関連企画

展示解説

担当学芸員が分かりやすく展示の解説をいたします。

10月13日(土)・21日(日)
各日とも午後1時半～(20分程度)
※当日観覧券が必要です。

♪寅彦愛用の蓄音機を愉しむ♪

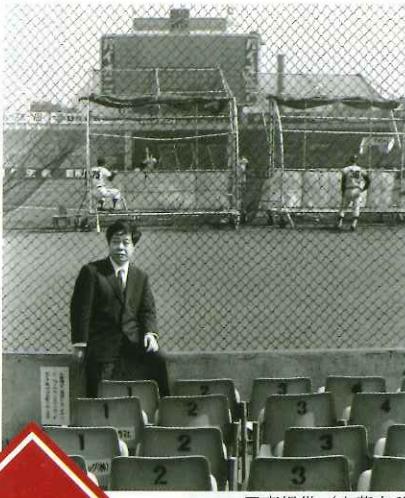
カルチャーサポーターの朗読とともに、寅彦愛蔵の蓄音機と、愛蔵のレコードをお聴きいただけます。(要観覧券)

日時：10月14日(日)14:00～ 場所：文学館ホール
定員：100名／事前に電話でお申し込みください



開館10周年記念 清岡卓行追悼展

平成19年11月2日(金)～12月19日(水)
(※会期中休館日なし)



写真提供／文藝春秋

- ◆会場／高知県立文学館 2F企画展示室
- ◆観覧料／一般550円(常設展含む)
- ◆開館時間／午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

平成18年6月3日に亡くなられた、高知出身の作家 清岡卓行さんを偲んでの追悼展。今回の展覧会では、ご遺族や日本近代文学館・阿藤伯海記念公園を持つ浅口市などが所蔵している清岡さん関連の写真、原稿、創作・関連資料、遺愛品、書簡等、厳選した約200点を展示し、清岡さんの人と文学を顕彰する。

☆オープニングセレモニー 平成19年11月2日(金)午前9時～

- ・ご遺族や知人の方々とともにテープカットをおこないます。
- 当日は展示解説もございます。

☆記念講演会 平成19年11月3日(土・祝)午後2時～

場所：高知県立文学館1階ホール
内容：京都大学名誉教授・フランス文学者 宇佐美齊氏による講演
参加料：企画展観覧券が必要です(但し、2割引)
定員：100名／お電話・受付にてお申し込みください(Tel: 088-822-0231)

イベント 案内

高知県立文学館 朗読の会

秋、土佐の女流文学を味わう

大原富枝、西岡寿美子、小山いと子の
作品を耳で愉しんでみませんか？

平成19年10月20日(土)
午後2時～4時 文学館ホール

入場
無料

北と南の民話語りくらべ

海外でも幅広く活躍している福島県在住の語り部・横山幸子さんと、高知を代表する語り部市原謙一郎さんによる民話の語りを聞いていただけます。民話の語りのコツもさけますよ！



10月21日(日) 入場無料

時間：午後2時～4時 場所：高知県立文学館ホール
※参加ご希望の方は事前に電話にてお申し込みください。

利用案内

開館時間 午前9時～午後5時(入館は、午後4時半まで)

休館日 年末年始(12月27日～1月1日)を除き、無休。

観覧料 一般350円

特別企画展のあるときは、料金が変わります。
20人以上の団体は2割引。高校生以下、高知県及び高知市長寿手帳所持者及び身障者手帳、療育手帳、障害者手帳、戦傷病者手帳及び被爆者手帳をお持ちの方とその介護者1名は無料です。

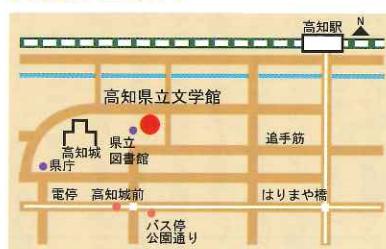
駐車場 なし。ただし近辺に有料駐車場があります。

附帯設備 ホール、ミュージアムショップ、閲覧室、茶室「慶雲庵」
貸出施設 企画展示室、ホール、茶室

E-mail:bungaku@kochi-bunkazaidan.or.jp

<http://www.kochi-bunkazaidan.or.jp/~bungaku/>

交通のご案内



- 高知駅馬鹿空港より空港バスではりまや橋下車徒歩20分
- JR高知駅下車徒歩20分
- 土佐電鉄電停高知城前下車北へ徒歩5分
- バス停公園通り下車北へ徒歩5分



〒780-0850
高知市丸ノ内1丁目1-20
電話 088-822-0231
FAX 088-871-7857